

## 「新生」における虚実

塚 本 な な

た。

### 3 「悲劇の自伝」

が、果して『新生』に描かれた事は全て事実であつたらうか。時間的経緯を事実そのものにとつて誤りはないであろうか。実は、そこには当の姪駒子さえ見出せなかつた（あるいは気付いていて触れなかつたのか）藤村の嘘があつたのである。まずその部分を指摘しよう。

藤村の手になつた大正五・六年の書簡類を『新生』本文の内容と照らし合わせてみたところ、どうしても腑に落ちぬ箇所が出てきた。それは捨吉の再婚に関する部分であるが、第二部四〇章（以下Ⅱ40と示す）に次の文がある。

「……現に根岸の姪（愛子）の以前師事した校長先生といふ人からも、縁談に關した手紙を貰つた。校長先生の筆で、是非彼に勧めたい人があると言つて、先方でもこの話の成立つことをひどく希望して居ると書いてよこして呉れた。委細は根岸に聞いて見て呉れ、世話したいと思ふ人と愛子とは同期の卒業生であるとも書いてよこして呉れた。

### 1 「島崎藤村」

#### 2 鍵田研一「島崎藤村年譜」

たとえば次男鶏二の生まれた年や、妻冬子の死亡日などを訂正し

この縁談には岸本の心はやゝ動いた。相手は全く見ず識らずの婦人ではあつたが、日頃近い根岸の姪を通して先方さきの人となりや周囲の事情を知り得るといふ何よりの好い手掛りがあつた。兎も

角も根岸によく相談して見るといふ禮手紙を校長先生宛に出して置いて、彼は愛子から来る報告を待った。」

そしてここに大正五年十一月九日の西丸哲三（愛子の夫根岸のモデル）宛の次の手紙がある。

「……(1)を聞きたいと思ひます。尤も小生は誰でもいゝから結婚を急ぐといふやうな考は毛頭持ちません。適當な人がなければ此俣獨りで通してもいゝと考へて居る位です。小生の性質と境遇とは御存じの通りです。」

一體西澤之助氏からどうしてこんな話を持ち込んで来たのか、一寸突然で驚かされました。同氏からいさの許へでもそんな相談でもあつたのでせうか。

西氏へはいづれ熟考の上、改めて御返事するといふ手紙を出して置きました。いさもいそがしがつて居るでせうか、この事に就き精しく手紙で言つてよこして呉れるやう御伝へを願ひます。

（後略）

この十一月九日付の手紙とII 40の内容が一致していることは明らかであろう。西澤之助氏とは愛子のモデルである西丸<sup>いさ</sup>勇子の学んだ日本女学校の校長であり、前の四〇章の「校長先生」にあたる。「一體西澤之助氏からどうしてこんな話を持ち込んで来たのか、一寸突然で驚かされました。」又、「西氏へはいづれ熟考の上、改めて御返事するといふ手紙を出して置きました。」の文から考へても、再婚に関して藤村が西氏へ出した手紙はこの時がはじめてであり、「根岸によく相談して見るといふ禮手紙を校長先生宛に出して置いて」というのは十一月九日の数日前の事であり、それ以前にさかのぼっては考えられない。

1 前書の部分なし

又、続いてII 41には

「根岸の姪からは間もなく委しいことを知らせてよこした。愛子は彼女の学友に就いて、岸本の方で知りたいたいと思ふやうなことは、一々女らしい觀察を書いてよこした。その人の生立ちに就て。その人の氣質に就て。（中略）

こゝまで話が実際に形を具へかけて来た。（中略）  
『御手紙は難有う。自分はこの縁談に就いてもつとよく考へて見たい。』

斯ういふ意味の返事を根岸へ出して置いて、岸本は斯の縁談のあつたことを義雄兄に話した。』

の文があるが、これに相当する手紙も幸い残っている。

「御手紙難有う。」

いろいろこまかいことがよく分りました。先方でも別に急ぐ問題ではありませんまいし、私も只今は非常に仕事がいそがしくて居りますから、さしあたり「宿題」として留めて置きたいと思ひます。自分でもゆつくり考へて見たいと思ひます。（後略）

十一月十一日付の西丸いさ子宛の手紙である。

さて、これらの書簡から判るように、藤村が西氏からいさの同級生であつた女性を勧められ、それに関して手紙をやりとりしていた時期は、十一月上旬のことである。しかし、これが『新生』の捨吉の場合には、九月上旬のこととして扱われているのである。それは、「岸本は家の近くに二間ある二階を借りた。九月のはじめからそこを飯の書齋として、食事の時と寝泊りする時とは家の方へ通つた。」（II 37）

とある後におきたことであり、「朝顔もさかりを過ぎた頃であつたが」(II 43)、「九月も末になつて見ると」(II 44)とある前のこととして書かれていることから明らかである。すなわち、再婚に關しての手紙のやりとりの時期が、岸本と藤村とでは、二カ月ほどずれているのである。

これは一見、単なる誤りとして、とりあげるべき問題とは思われぬかもしれない。先にあげた伊東一夫が、もし事実<sup>に</sup>反したことがらがあるとするれば、II 88の数珠の説明が、「幾つかの透明な硝子の珠をつなぎ合せて、青い清楚な細紐に貫通したものとあるが、実は「黒い珠の中に赤いのが両側に三つあてついた紫色の紐を通したものである」と述べている(1)、この種の誤りとも思われるであろう。

#### 1 「『新生』事件と島崎藤村」

又、「新生」はあくまで一作品であり、その作品内の年月日や内容を作者の私生活と照らしてどうこう言うのは邪道であり、些末主義のよう<sup>に</sup>思われるかもしれない。しかし、藤村の作品の多くが自伝的作品であり、彼が特に自己の生を凝視してきた作家であるだけに、その内でも特に「新生」は、叔父と姪との不倫な關係すなわち次兄の娘を懐妊させてしまうと<sup>い</sup>う、社会的に全く否定されるべき事件を扱ひ、しかもそれが未解決の段階で発表された作であるだけに、「私生活」とは切り離し難い位置にあるのである。否、たとえそれが可能であつたとしても、実はこの「ずれ」にこそ、『新生』を解く一つの鍵があると思うのだ。

結論を先に言えば、この「ずれ」は単なる誤りでも、作品化上のやむを得ぬ「ずれ」でもない。実に藤村の周到な計算の上になされてい

るものであり、捨吉の「懺悔録」と藤村の「新生」との相異をはつきりと示すものである。藤村が「新生」で描こうとしたものは何か、何故に後に第二部を削り一部のみを「寢覚め」と改題して残すようになったのか、私はこの点をも、この「ずれ」から考えてみたいのだ。

まず、この「ずれ」についても少し詳しく見てゆきたい。すなわち、藤村が何故そこに二カ月間の「ずれ」を必要としたのか、事実のままでは何が都合が悪かつたのか、という問題である。

『新生』によると、節子に対し「片腕で足りなければ両腕を差出さうとするやうに成つ」(II 44)でも前述の手紙の如く「未だ根岸の姪から賛成してよこした例の縁談を断つてまでも、節子を自分の肩に負はうとするほどの決心はつきかねて居た」(同)岸本も、「身も心も投出して救ひを求めて居るやうな節子の姿」(II 45)を見、『でも、ほんとに力を頂きましたね。』(II 49)と悦んで見せるほどになった節子を見ているうちに、「もし節子の方から進んで罪過の責を分たうとし、彼女の一生を叔父に託してまでも不思議な運命を共にしようと言ふならば、(中略)再婚の生活なぞを断念しようと思へ考へ」(同)移つてゆくのだが、岸本は「節子と彼自身のために、互に別れ住む日の来たことを楽しく考へ」(II 53)、又、節子のいない淋しさは彼に「まだ若い女のさかりの身で一生を託してもいゝと言ふほど可憐な心を持つ人を救はうが為には、(中略)何もかも彼女に与へようとするほどの情熱」(同)を感じさせるようになる。眠りがたい夜が続き、彼は初めて「節子に対する自分の誠実」(同)を意識する。「未だ自

分は愛することが出来る」(II 55)と考え、「深い喜びと驚きとに打たれ」(同)る。そして、根岸の姪から再び例の縁談に關した手紙を貰った時には、「最早岸本の心は定まつて居」(II 57)たのであり、次のような返事を愛子宛に出したのである。

『有難う。いろいろ御心配を掛けて濟まなかつたが、自分は熟考の上で御断りすることに決心した。校長先生へもよろしく伝えて下さる。』(同)

この再婚を断つた時期について、「新生」では直接に述べられてはいないが、十二月下旬という推定が可能である(1)。これは事実では十一月二十七日のことであった。次の西丸いさ子宛の書簡を見てほしい。

「先日はおいそがしいところを御手紙頂きいろいろ御心配下され難有う御座います。私も熟考の結果左に申上ります。

西先生よりの御話は何卒御断り下さい——私も先生の御厚意を無にするものではありませんから、その邊も、厚く御詫びを願ひます。

野口先生の御話(2)を、問題的に受取つたのは自分の不覚でした。あの話もう水に流して下つて下さい。

当分私は宿題のことを考へまいと思ひます。さういふ話から一切離れて居やうと思ひます。これは実に熟考の結果です。

いろいろと御心を煩はし濟みませんでした。西丸君へも何卒よろしく。

十一月二十七日 春樹  
いさ子どの

1. 十一月から十二月にかけての『新生』での時間的経緯は、事実

と照合しなくても、よく読んでゆけば不自然なことが明らかであるが、再婚を断つた日については、十一月半ば過ぎのひっこし(3)の後で、師走十日の旅の前事として書かれている。

2. 野口小類。先に、彼が日本画を教えていた弟子の堤千世(後に日本舞踊の若柳吉登代となった人で、藤村とは東京音楽学校時代に知り合った)を勧めたことが、十一月十一日付の藤村書簡に明らかである。

ここで私が驚かされたのは、藤村が「進んで新生活を開きたいと思つて」(1)からそれを断念するまでの期間が、実にわずか十六日間であったという事実である。捨吉の場合の二カ月半とは比較にならない短さなのである。いったい、人の気持は移り変わり易いものと言つてもわずかに二週間ほどの間に、「進んで新生活を開きたいと思つて居る」と言つていた藤村が、捨吉のように、「もつとよく考へて見たい」(II 41)という心から、「何もかも彼女に与へようとするほど」(II 53)の心になり、駒子を思つて眠れない夜を送り、「未だ自分は愛することが出来る」(II 55)等と喜ぶ心にまで移つていったとは、どうしても考えられないのである。あまりに不自然なことではないか。

1. 十一月十一日付の西丸いさ子宛書簡より。

否、たとえこれが事実であつたならば、何故に藤村はこの「人間の不思議さ」を、人間の生活の眞実(4)として作品『新生』に描かなかつたのだ。何故に岸本の方に二カ月という月日を加えてしまつたのか。それこそ、藤村がこの不自然さを最もよく認めていたことの、この不自然さを自然らしく見せる為にはこうせざるを得なかつたこと、あらわれではないか。

1. 『市井にありて』 「芥川龍之介君のこと」より。ここで

藤村は、かつて『ある阿呆の一生』の中で「……彼は『新生』の主人公ほど老獪な偽善者に出逢ったことはなかった」と書いた芥川に対し、「人間の生活の真実がいくら私達の言葉で盡せるものでなく、又書きあらはせるものでないことを心に潜めたと上での人で、詮かつ私の書いたものが嘘だと言はれるならば」云々と述べている。

ではこの不自然さとは何であったのか。実は、この段階での（あるいは最後まで）藤村には駒子に対する愛も誠実も無かった。と言っても過言ではないと思うのである。すなわち、藤村が再婚を断念した直接の原因は、決して姪に対する情熱などからではなかったのだ。それはまさに「駒子がまた妊娠したかもしれない」という恐れからだったのだ。

節子が岸本に「二度母にならないとも限らないような心配らしい口吻を泄らした」(1)のは、義雄一家が高輪から谷中の家へ引移ってゆく数日前のこととして描かれている(2)。そして、節子はその心配を持ったままひっこして行ったのである。これは事実も同じであったろう。広助（藤村の次兄で義雄のモデル）一家がひっこして行った日は、十一月二十二（二十五日であったと考えられるが(3)）これからすると藤村が再婚断りの手紙を出したのは、この不安の真只中に於てではなかったのか。「もし愛子の学友が自分の過去を知つたなら、断つて呉れて反つて可かつたと思ふであろう、と想像した」（II 57）と捨吉は言っているが、藤村の場合は、「自分の過去、そしてそれ以上に現在」であつたはずだ。

1 II 123

2 II 123

3 (1)十一月九日付の西丸哲三宛書簡に「廣兄の家でもまだ新居は定まりませんが、多分五六日のうちには他へ引移ることになるでせう」とあり、十一日付いさ子宛書簡を見ても、まだ新居は定まっていない。(2)廣助が新居を下谷に見つけた後、ひっこしの仕度や掃除に数日を用いている、(3)ひっこしの予定日が雨で延びた、(4)ひっこしの後、十一月二十九日迄の間に、駒子とその弟とが来て写真を撮った事実がある、等から推定。

「十一月を迎へるやうに成つて節子は眼に見えて違つて来た。三年も彼女の側に居て彼女のために心配しつゞけた祖母さんまでがそれを言ふほど違つて来た。彼女の動作から彼女の声まで生々として来た。」(II 49)

このような姪の姿を見て、岸本が「もし節子の方から進んで罪過の責を分たうとし、彼女の一生を叔父に託してまでも不思議な運命を共にしようと言ふならば、（中略）再婚の生活などを断念しようとさへ考へて来た」（同）のに対し、藤村の方は、元氣になった駒子に安心してか、再婚の準備をはじめ出したのであった。これはまさに九月上旬の岸本の姿である。

横道にそれるようであるが、この月の半ば頃執筆された『故国に帰る』(4)の最終章である「二十」の次のような文からは、藤村の「新しい生活」にかけた決意・意欲がよく読みとれはしないだろうか。勿論これは、隅田川に呼びかける形で、日本の真の日の出、真の近代化を訴えているものではあるが、その裏には藤村自身の日の出・新生活

への脱皮の願いも強く存在していたであろう。

「流れよ、流れよ、隅田川の水よ。少年の時分からのお前の旧馴染が復たお前の懐裡へ帰つて来た。(中略)私が旅に出た時分から見るとお前は一層黙つて了つたやうな気もする。お前の聲は奈何したらう。何時迄お前は其様に沈黙を続けて居るのだらう。お前の河岸の変遷と工業化とに壓せられて、お前の白魚が死にお前の都鳥が飛去つたやうに、お前の聲も涸れ果てたのだらうか。遙に川上の方から渦巻き流れて来るお前の水が有るかぎり、お前の詩が涸れ果てようとは奈何しても思はれない。私はお前から溢れて来る詩を知りたい。お前の沈黙を破つた声を聞きたい。(中略)お

前の岸にある不思議な不統一。私はそれをお前に問ひたい。お前が眼のあたりに見た驚くべき大改革とは人の心に「推移」をば齎したらう、しかしながら人の奥に「改革」を齎したらうかと。それを思ふと私は言ひ難ひ幻滅の悲哀に打たれる。お前はセエでもなく、テエムスでもなく、矢張一番親しみの深い隅田川だ。往昔、多感多情な詩人が口嘴の紅い都鳥を見て情人の生死を尋ねた歌をお前に残した。それほど古い歴史のあるお前だが、私は若いお前を望みつつそれを頼りにして遠い旅から帰つて来た。何となくお前の水はまだ薄暗い。太陽の光線はまだお前の岸に照りついて居ないやうな気がする。お前の日の出が見たい。」

1 東京朝日新聞に九月五日より十一月十九日まで連載された。後『海へ』に収む。

しかし、「新しい生活」にかけた彼のこのような望みも、駒子から二度母にならないとも限らないやうな心配」を聞かされて、急遽く

ずれ去ってしまった。再婚を断つた手紙を出した藤村には、おそらくそれをためらう余裕もなかつたであろう。

さて、事実はこのような事情であつた藤村にとっては、「新しい生活」を望んでからそれを断念するまでの期間がわずか二週間ほどであつたとしても、少しも不自然ではない。しかし、彼は事実を事実のまま『新生』に書くことはしなかつた。『新生』に描かれた捨吉の心境と藤村の心境とは明らかに異っているのだ(1)。そしてそこからくる不自然さを自然らしくするためには、彼はどうしても二カ月という期間を加えざるを得なかつたのである。

1 この点については、後で詳しく述べたい。

廣助一家がひっこして行つた日については、藤村や廣助達だけでなく、『新生』読者の中にも記憶に持つものはいるであろう。それゆえ藤村はひっこしの日を中心に、前に二カ月というずれを巧みに設けたのだ。しかし、この「自然らしく見せるためのずれ」は、前だけでなく後にも設けざるを得なかつたようである。

それでは再び『新生』に戻つて、その後の事件経緯を追つてみよう。

I ひっこしの翌々日、節子から引越の模様を知らせる手紙が来る。

(II 53)

II 岸本は節子を思い五晩ほど眠られなかつた。彼は到頭節子に心胸を打明けた手紙を送る。(同)

III 節子から返事が来る。(II 54)

IV 義雄が郷里から戻り訪ねて来る。(II 55)

V 眠りがたい夜がまた続く。(II 56)

VI 節子が弟を連れて訪ねて来た。その日、一同で写真を撮る。(同)

VII 根岸の姪から再び再婚に關した手紙を貰う。岸本は断りの返事を書く。(II 57)

VIII 丁度その日節子が手伝いに来た。(同)

(同)

IX 岸本は自分の情熱に驚く。眠れぬ夜が、やがて一月ほども続く。

(II 59)

XI 師走十日過ぎに小旅行を思い立ち、家を出る。(II 61)

右のように簡単にまとめてみたが、このうち事実と同じであるとわかっているのは(VI) (I)と(VII)であり、おそらくそのみであったろう。(2)というのは、(XI)の「師走も十日過ぎに成って岸本は小旅行を思立つた」とII 61にあるのは、藤村の場合は十一月二十九日のことで、十日にはすでに戻っているのである。このわずかな間に(I)から(X)までの事件がおこるはずがないの言うまでもない(3)。

1 藤村が出先から権藤誠子(手伝いの女で『新生』の久米にあたる)宛に出した十一月三十日付の手紙に「寫真がもし出来ましたら一葉はこま子の方へ御送付下さるやう」とある。

2 (IV)は事実かもしれないが、確証がつかない。

3 (VIII)の返事を出した日に節子が来てそのメモをみせて安心させた等は(VI)と重ねて全て二十七日のことだったという場合もありうるが、これはたいした問題ではあるまい。

さて、二十九日と言えば、再婚を断る手紙を送った翌々日で、ひっこしの日からは四〜七日後のことである。こう言えば見当がつくであろうが、彼のこの妙義地方への旅というのは、まさにフランスへの旅の小型判であったのだ。藤村には「久しぶりで山地に近い温泉場ま

で行き、榛名妙義の山嶽を汽車の窓から望み、山気に包まれた高原や深い谿谷に接するといふ楽しみがあった」(II 61)わけではない。

「あの鹽分の強い濁った硬泉の中に浸りながら、碓氷川の流れる音でも聞いて遠い旅から疲れて帰って来た身も心をも休めたいといふ楽しみ」(同)があつて「ぶらりと高輪の家を出た」(II 60)のでも決しない。耐えられぬ不安から飛び出して行つたのである。

妙義への旅に立つ日に『中央公論』の瀧田構蔭に宛てた次の如き手紙からは、この時の藤村の苦しみがよく知られよう。

「帰朝後の身體はまだ十分に回復致さず、加ふるに長く留守にせし後始末等にて心を勞すること多く、御約束の原稿も思ふに任せず昨夜のごときは、徹宵しても稿を続けんと机に對しながら、身心の激動には打ち勝ちがたく、遂に筆を擲ち申候。

御編輯上の御手達ひ、渡歐の際の御厚意、其他今回の原稿に對して内金迄も拝借せしことを思へば、小生は殆んど申譯の言葉を知らず。いかなる御立腹をも覚悟の上にてこの書きにくき手紙を認め申候。帰朝者としての一身を御憐み下さらば難有く候。

小生はいづこかの温泉へなりと参り激しき疲労の身心を養はんと思ひ立ち候。

十一月廿九日夜 島崎生

瀧田學兄

加えて、最近権藤誠子の手元から『海へ』(I)の書き反故が現われたが十枚近く書き出しただけの反故があるという事実も、藤村が書き悩んでいたことの裏付けとならう。そして藤村は誠子にも、出先の廣助の家から次のような手紙を送っているのである。

「昨日は家を出てから雨を衝いて家兄を訪ひ、めづらしき心地にて新居を見、よもやまの語に夜をふかしました。」

すくし風心地でもありませんから、あるひはもう一晩厄介になり、その上で極く気厭な小旅行を致して来るつもりです。帰京はおよそ十日頃と御思召下さい。七月帰国以後漸く休息の時が来た心地も致します。今回は中央公論の方や文章世界の方へ実に申譯のないことを仕でかし面目もない次第ですが、身心の激動と疲労とはこの結果に立ち到りました。瀧田君も定めし御立腹のこと、存じます。同君の氣質を思へば小生は合はせる顔がありません。もし同君が見えましてら何卒あなたからも宜敷おわびをして置いて下さい。斯様な心配をあなたに迄掛けまことに濟まない次第です。

(中略) 今回の小旅行は一切を忘れて休養して參らうと思ひますから郵便物などは一切御預置き下さい。(後略)」

1 前述の瀧田樗蔭から依頼されていた原稿で、翌年四月に『中央公論』創作欄に発表された。

「新生」によると、岸本は節子から来た手紙の端に「最早僧坊生活の必要もなくなりましたから、御安心下さい。」(1)という短い言葉を読むまでは安心しなかった、とある(II 123)。この時は藤村の場合であったのだろう。おそらく旅から帰ってからであろうが、あるいは、私は以上かなり断定的に述べて来たが、この旅行の前か、姪の家へ立寄った際知ったのかもしれない(2)。しかし、いずれにせよ、「眠りがたい夜が続いた」(II 53)のも、「自分で自分が持ち切れなくなつて来」(同)て、「終には自分自分を可恐しく思ふやうに成つた」(II 60)のも、藤村の場合は、決して姪に対する「情熱」や「誠実」

「愛」からではなかったことは、もはや明らかであろう。そういった気が起つてきたとしたら、それはもっと後になってである。(3)。

1 節子から妊娠の不安を聞かされた時、岸本は「二度とあんな旅に出かけるなんてことは、俺には出来ない。もしそんな場合が起つて来るとしたら、俺は死ぬより他に仕方がない。さもないれば、寺院へでも入つてしまふ。そんな話を聞いたばかりでも、俺はもうこの頭を割つてしまひたく成つた——」(II 123)と言っている、これに答えたもの。

2 まずこういったことはあり得まい。(後述)

3 節子から来た手紙の内容などが、姪駒子の出したものと一致していることはすでに認められている。(このことから(2)の姪の家へ立寄つた際云々はあり得まい)しかし、II 54からII 57に出してきた姪からの手紙は、実際にはもっと後のものであつたはずである。

以上、随分くどくどと事件推移の「ずれ」について述べてきた。これが作者藤村の計算によるものであることは、もう述べるまでもあるまい。が、藤村の計算を言うならば、次の点について触れておかねばなるまい。否、むしろ私はこの点の方こそ強調したのである。それはもう一つの、もっと大きな、構成上の「ずれ」およびそれから生ずる矛盾についてである。

今まで記してきた中で気付かなかつたであろうか。捨吉が新生活を望んでから、それを断念し節子との新しい心に生きようと決心するまでの経過が、II 40からII 60あたりに書かれているのに対し、節子が二度母にならないとも限らないような心配らしい口吻を泄らし、苦しい



不安な日を送ったことについては、六十章も離れたII 123 思い出の形でポツンと出てくるだけなのである。事件推移の中では、この不安や苦しみについては一言半句触れられていない。

それだから、素直な読者が、前述の二カ月の「ずれ」には少しも気付かず、II 40からII 60あたりを読んではそのまま受けとめ、II 123にきて「ああ、そういう事もあったのか。」と思うだけであっても、全く無理からぬことなのだ。この「ずれ」が先の二カ月の「ずれ」をも可能にしているのである。II 123の思い出を六十章も前の事件経過の中に当てはめて、その矛盾を見出す読者はいなかったのである。

私も、炬燵に寝ころんで、菓子を片手に『新生』の年表らしきものを暇つぶしに作るまでは、全く素直な読者であった。そして、その内ふと「確か、岸本は節子が再び妊娠したのではないかと心配したことがあったはずだけれど、あれはいつ頃だったかな」と考えたのだ。

「節子との関係が復活してからだだからII 37以後だ。」そう思って読んでいったが出てこない。「ひっこしの頃かな」「人形を送った頃だったかな」その内に「告白の聲を聞いた。」などというところまでいってしまう。また読み返すが出てこない。何度読んでも出てこないはずである。すでに捨吉が「懺悔の稿」を書き出したという後のII 123になって、やっとこの部分を見つけたのだから。そして、それをII 50あたりにはめこんでみた時、はじめて全てがわかったのだ。藤村は、この姪の「再度の妊娠の不安」については、全く消しかかっているのである。読者の目を完全にそらせてしまっているのである。これほど藤村の『新生』と捨吉の「懺悔の稿」の相違をはっきりと示す事実はあるまい。

事件経過の中から完全にのぞかれ、しかも、六十章も離れて、思い出の形で書かれているので全く気付かなかったが、読みくらべてみればこのあたりの『新生』の記述は矛盾だらけである。「もしそんな場合が起つて来るとしたら、俺は死ぬより外に仕方がない。」(II 123)とまで言い、節子から例の手紙が来るまでは「何といふ不安な日がそれから二人の上に続いたらう」と思い返している同じ捨吉が、同じ時に、「別れ住む日の来たことを楽しく考へ」(II 53)、節子呼んで「眠りがたい夜」(同)を送っていたのである。

さらに考えてゆくと、六十章も離してこの「妊娠の不安」云々に触れているということは、あるいはII 60あたりを書いていた時の藤村は、『新生』からこの件については全く消し去って一口も触れまいとしたのではないか、とも思われてしまうのだ。II 53の次の文を見てほしい。

「最早、節子は岸本の側に居なかつた。彼女の母親も、彼女の弟達も居なかつた。何となく下谷の住居の方へ嫂を見送ったことを一くぎりとして、あの嫂が祖母さんや一郎を引連れ、郷里の方から出て来て呉れた日以来の家庭の小歴史に、そこに一つの線でも引いたやうな区劃が岸本には見えて来た。殊に岸本は節子と彼自身のために、互に別れ住む日の来たことを楽しく考へた。何故といふに、不思議な運命を共にしようとする二人にあつては、互に抑制することを学ばねば成らなかつたから。弱い人間である以上、もう一度岸本が遠い旅にでも出なければ成らないやうなことが、決して起つて来ないとは限らなかつたから。

節子を送り出して見ると、餘計に岸本はその心持を深くした。」「もう一度岸本が遠い旅にでも出なければ成らないやうなこと」は、

「節子を送り出し」たこの時点では、「起つて来ないとは限らなかつた」ではない、すでに起きてゐる、それも真只中なのである。今、私は、藤村の「新生」事件と捨吉との違いを言っているのではない。同じ「新生」という一作品の中で、このような矛盾が見られるのである。そして、くだいようだが、この二つの「ずれ」の為に今まで誰もこの矛盾に気付いていないのである。

藤村が、しかし、II 50あたりで「姪の妊娠」を全く消し去ってしまったかと言うと、そうでもないように思われる。「思われる」とは、曖昧なようだが、例の藤村流の言い廻しで書かれているため、はっきりと断定はできないのだ。たとえば次のような言い方である。何度も例にとつた所であるが、

「もし節子の方から進んで罪過の責を分たうとし、彼女の一生を叔父に託してまでも不思議な運命を共にしようと言ふならば、彼は再婚の生活などを断念しようときへ考えて来た。それではもつと／＼節子を生かしたいと思つた。」(II 49)

の文の後に、『東京朝日新聞』の初出では、次のような文がつけ加えられていたのである。

「二人の間に生れて来る新しい生命を育てたいと思つた。その生命に生きたいと思つた。(傍点筆者)

そしてまた、II 55の

「岸本はもう甘んじて節子を負はうとする人であつた。彼は何等の家庭的な幸福を節子と共に享け得るではなし、そのために自分の子供を仕合せにする何等の希望をも繋ぐことは出来なかつたけれども唯彼女を助け、彼女を保護することを何よりの楽しみとし

て、二人の間の新しい心に生きようとした。」(傍点筆者)

この最後の部分が、初出原稿では

「二人の間の新しい生命に生きるといふに満足しやうとした。彼はもう二度目の結婚を断念した。」(傍点筆者)

となつていたのである。(1)

この「生命」という言葉の意味するものは何であろうか。私はこの言葉に大きな意味を見出したと思う。勿論この言葉は、後「新生」の初版では「心」と置き換えられたように、読者はおそらくひたすら「心」と同義に受けとつたであろうが、この「生命」という言葉こそ、たえずふかい罪業の意識を底に秘めていたであろう藤村の、わずかなしかし精一杯の「告白」だつたのではないだろうか。「生命に生きる」「生命を育てたい」と述べ、それがどちらの場合も「結婚を断念しよう」という言葉と共に並べられているのを見ても、ここには、再度の妊娠の不安を、そして、それが再婚による「新しい生活」を断念してしまつた直接の原因になつていたことを、全く消し去つてしまおうとした藤村の、ただ一つの、真の告白があるのではないだろうか。

そして、おそらく藤村はこの辺を書いている時、後で思い出の形ででも姪の妊娠に関して触れることは、考えていなかったのではないだろうか。以上のようなわずかな告白が見られるのも、II 123が書かれた後でその告白が削られてしまつたのも、かえつてこのことを立証しているように思われる。「決して起つて来ないとは限らないから」という前述の如き矛盾が生じてしまつたのは、藤村自身気付かなかつたであらう。

『新生』一篇の主題は、頑なな捨吉が、徐々に節子に対する「誠実」

を意識し、それに生きようとする過程にある、と言ってよいであろう。ところが、この主題となる過程は、決して藤村自身のものではなかったのである。そこに出てくる手紙や言葉は、確かに藤村と駒子のものであっても、そこに書かれている心が、かならずしも彼等、少くとも彼のものではなかったことは、以上の如きである。「新生」の岸本と節子の姿は作られたもの、藤村にとっては一つの理想でしかなかったのだ。

彼の「新生」がルソーの「告白」の影響を多分に受けている点については、すでに多くの指摘がなされてきているが、ルソーの真の意図を示す七巻の

「ただ一つたのみになる忠実な道案内がある。それは一連の感情のつながりであり、これが私の存在の連続をしるしづけ、また、その感情の原因あるいは結果になった事件の連続をも明らかにするのである。(中略) 事実の書きもらし、日付のとりちがえやまちがいは、やるかもしれない。だが自分の感じたこと、また感情の命じた行為についてまちがうことはない。そして、それこそ肝心のところなのだ。」(E)

の言葉をみれば、藤村は全く逆を行ったようだ。「事件や日付」を事実通りに再現し(これも理想像を作るために、前述の如く、事実と思われるよう巧みにずらさねばならなかったが)、「感じたこと、また感情の命じた行為」を全く別のものにしてしまったのだ。

### 1 桑原武夫訳「ルソー」の「告白」より

2 この告白にも、多くの変改と粉飾がほどこされてしまったようであるが。

勿論、現実的なディテールに忠実という中には、駒子やその父親等をはじめとする親族の者の眼、また新聞を読んでゆく周囲の者の眼を絶えず予想し、それを「新生」に盛り込まねばならなかったという實際的な配慮もあったことだろう。そして、この現実には藤村にとって幸いであった。

兄と絶交してまでも「新生」を書いた藤村であれば、現実的なディテールのみでなく、真の告白も成し得たはずである。たとえ「周囲の空気がそれを書くことを許さなかった」(A)としても、しかし、岸本が死んでゆく嫂に対しても何一つうちあけられず、「どうして本当のことといふものは斯う口に出せないのだらう。」(II 107)と嘆息したとある言葉は、「新生」を書いた後での藤村の言葉でもあったのだ。

「海へ」で述べた次のような言葉・心も、「新生」ではやはり実現しなかったのである。

「物の奥を窮め、物の真に達したいと願ふ精神はます／＼強くなるばかりであつた。この世にある美しいことも、醜いことも、愚かしいことも、気違ひじみたことも、すべてまことの姿に来て影を投ずる明るい鏡のやうな心。それを私は持ちたいと心がけた。」(C)

### 1 「島崎藤村の個性」柳沢健

#### 2 第一章「海へ」より

実際の配慮と、藤村自らの配慮から、彼は姪の言葉や手紙・事件を事実通り盛り込み、岸本には全く別の解釈をさせ、別の感情を持たせたのであった。

「岸本があの理想主義の中に酔ひ込める人物であるなら文句はない。併し「家」の作者の眼が、あんなところで物が見えなくなる

とは、到底われわれには想像出来ない。」(1)

こう広津和郎が疑問を投げかけたのもっともである。しかし、「物が見えなくなった」のでは決してない。「物が見えなくなる」ように書くことこそ、実は藤村のはじめから心したこと、今まで以上といつてよいほどの周到な計算だったと言えるのではないだろうか。表面上の事実のみを書き示してゆく中で、彼はかくされた事実を、そして彼の心を、読者に触れさせまい、としたのだ。

### 1 「新生」覚え書き

確かに「懺悔の書」という外観は成功した。そして、それによって世俗的には救われもしたろう。ここで、私は、真実を書かなかつたとして、藤村自身を非難するつもりはない。「新生」は真の「告白」ではないと言って、藤村を責めることもできない。しかし、作者としての藤村は、又藤村の精神は、それで救われたのだろうか——それを的確に物語っているのが、後、新潮社版「定本版藤村文庫」に収録された際、第二部が削られ一部のみが「寢覚め」と改題されて残された、という事実ではないだろうか。

一つの芸術作品として『新生』を見つめた場合、真実を書かなかつた云々と言うのではなく、主題といえる「恥しても恥しても恥じ足りないやうに思つた道ならぬ関係の底から是だけの誠実が汲める」(II 58) という喜びに至つた過程も、「自分の生涯の途中に、しかも老い行かうとする年頃の今になつて、節子のやうな女が自分の内部へ入つて来るやうになつた」(II 59) 「人生の不思議」、「新しい喜び」(同)に至る過程も、全て夢で、作者のものではなくて、それで『新生』が真に人をうつだけ力を持つのであろうか。「人間の生活の真実」を

書きあらわそうとするに、現実をひずめ、理想で処理してしまつた

『新生』が、真に「迷つた人間が、迷はない人間では味ひ知られない秘密な喜び」(1)を唄うことができたのだろうか。「秘密な喜び」も作者自身のものではなくって、少くとも私には味わえなかつた。「第二部」は、私にはどうしてもついて行けぬものがあつた。

### 1 「島崎藤村について」正宗白鳥

しかし、こうは言つても、理想を求め、その理想像が「人間の生活の真実」を訴えているとして人の心を打つ作品はある。しかし、『新生』に於ては、理想を、理想として追求することも又、不可能であつた。

これはまさに『新生』のみが持つ性格と言えよう——すなわち、藤村を世俗的に救つたディテールの再現は、逆に作品としての『新生』を縛るはめになつたのだ。彼が第二部を「再生の輝かしさに持つて行」(1)こうとし、岸本と節子がかくありたいという理想化をなそうとしても、その理想の実現は事実の素材の上にか成り立ち得なかつたのだ。駒子ではない、創作上の節子のみ言葉や手紙を、勝手に作りあげることではできなかった。周囲の眼を考えれば、新しい事件を作りあげることでもできなかった。理想化に際し藤村がなし得たのは、都合の悪い事実は消し去り、節子の心理に対しては「物が見えなくなった」ふりをよそおい、事件をわからぬ範囲でならび変えるくらいのことだつたのだ。それが、

「節子は、あまりに岸本の人生観なり趣味に張りつけられて仕舞つた。」(2)

というやうな節子の描かれ方に対する批判を生み、ある者は「彼女だけに宗教の道を指示し、自己はもとのままにとどまつて

いる。」(3)

と述べ、ある者は逆に

「(二人の得た「新生」について)主人公の方はうなづける。ロインの方はまだうなづけない……肯定すべからざるものを肯定した上にひとりで起つた不自然な感じ、それをどこまで行つても取去ることはできない」(4)

と述べるような結果を招いたのも、当然のことと言えよう。

1 先にもあげたが、柳沢健が「島崎藤村の個性」の中で「彼はそのとき、彼の『新生』をその結びとなる再生の輝かしさに行つて行くために、パリから帰朝してからの陰惨極まる生活面をできるだけ詳細に描写する——すなわち一卷分をそれに割かうと考へたものだが、周囲の空気がそれを書くことを許さなかつた、と私に語つてゐた。」と述べている。

2 「藤村氏の女性描写」岡本かの子

3 「島崎藤村」吉田精一

4 「藤村『新生』——『月々夜々』田山花袋

そして、作品のみでなく、藤村自身にとつても、その時点で「新生」が成立していたわけではないから、これは彼にとって激しい後悔となつて、彼の心を絶えず責めたてていたのである。彼は第二部を削り、一部のみを残した際、こう語つてゐる。

「こんな悲哀と苦悩との書ともいふべきものを、今更読者諸君におくるといふことすら気がひける。しかし、これなしにはあの

「風」にまで辿り着いた自分の道筋を明かにすることも出来ない。この作、もと二部より成るが、本来なら更に一部を書き足し全

體を三部作ともして、結局この作の主人公が遠い旅から抱いて来た心に帰つて行くまでを書いて見なければ、全局の見通しもつきかねるやうな作で、人生記録としてもまことに不十分なものである。それに、これを書いた当時と二十年後の今日とは、周囲の事情も異り、人も変り、さういふ自分の心の持ち方も改まつて来てゐる。そんなわけで、この文庫第七篇のためにはむしろ第一部を選び、作中の主人公が遠い旅に出るから帰国を思ふまでのくだりにとどめ、題も「寢覚」と改めた。

今日になつて見ると、これを書いた当時わたしは新生といふ言葉に拘泥し過ぎたことに気づく。新生が新生であるといふのは、それが達成せられないところにある。さう無造作に出来るものが新生でもない。その意味から言つても、今回改題の「寢覚」こそ、むしろこの作にふさはしい。(後略) (『寢覚』附記)

『新生』第二部にきて、「どうもすっきりしない」ものを感じ、調べてみたら以上のような結論に達し、我ながら「うーん」といった感じである。ここで最後に私自身の感想を述べさせてもらつと——ロマンティックな藤村詩を愛唱し、同じ郷里ということからも彼に好意をよせて、以前『新生』を読んで感銘を受けた私は、ここで今までの藤村感や『新生』論を少なからず変えることになつたが、読みが変わつたにもかかわらず、やはり私は『新生』が好きなものである。それは、藤村がかくそうとすればするほど、美しいものに、理想的なものにし

ようとすればするほど、陰にチラッチラッと彼の本当の姿がのぞく。「いかにしても生きよう」とする作者の姿が、醜いほどの人間の一面が、美しいはずの新生の姿の陰に時々姿を見せ、そういう作者の意図とは全く別の所に、私はそれこそ「人間の真の姿」「人間生活の真実」を読むからである。そして、改めて『新生』とは不思議な作品だと思った。